



Title	日本語の認知的モダリティと疑問
Author(s)	宮崎, 和人
Citation	大阪大学, 2002, 博士論文
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/2050">https://hdl.handle.net/11094/2050</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	宮崎和ひと
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第16701号
学位授与年月日	平成14年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化表現論専攻
学位論文名	日本語の認知的モダリティと疑問
論文審査委員	(主査) 教授 工藤真由美  (副査) 助教授 石井 正彦 教授 金水 敏

#### 論文内容の要旨

本論文は、現代日本語の叙述文と疑問文の叙法性(モダリティ)を、両者の相関性という観点から体系的に記述したものである。

総論にあたる第I章「モダリティの概念」と第II章「現代日本語の認知的モダリティ」では、まず、モダリティとは「言語活動の基本単位としての文の述べ方についての話し手の態度を表し分ける、文レベルの機能・意味のカテゴリーである」という筆者の立場を示し、モダリティの表現手段の中核をなす、形態論的カテゴリーとしてのムードの体系記述を行なう。続いて、認知的モダリティを「現実と命題内容との関係についての話し手の認知的態度を表す文法的カテゴリー」と規定し、認識のムードの基本体系を無標形式とダロウ形式の対立として記述した上で、認知的モダリティの全体像を見渡している。

第III章「意志・推量の疑問化」と第IV章「認知的モダリティとしての<疑い>」では、シヨウ、ダロウとその疑問形シヨウカ、ダロウカとが「判断の決定段階・未決定段階」で対立していることを中心に記述する。続いて、ダロウカとノデハナイカを「疑い」の形式と呼び、ダロウとダロウカの形態論的対立の間に、ノデハナイカが割り込むようなかたちで位置づくことを中心に論じる。

第V章「情報ダイクシス表現としての「ダロウ」」では、ダロウを情報ダイクシス表現と考えることで、推量、疑い、確認要求の諸用法が統一的に説明されうことを示す。第VI章「終助辞「ネ」と「ナ」」では、終助辞「ネ」が、「認識の現場性」という中核的な意味を独話助辞「ナ」と共有しつつ、対話助辞として「同意要求、確認要求、行為実行の約束の要求」のような聞き手めあての機能を獲得していく様相を記述する。第VII章「確認要求表現と当為性判断」では、ダロウネという複合形式において「当為確認」という意味構造が発達していることを中心に論じる。第VIII章「否定疑問文の述語形態と機能」では、「(ノ)デハナカッタカ」と「(ノ)デハナイカ」とが異なる確認要求表現のタイプであることを明らかにする。最後に第IX章「確認要求表現の体系性」では、確認要求を「話し手の認識・判断を示しながら、それが妥当であることの確認を聞き手に求める行為」と規定した上で、第V～VIII章で取り上げたすべての確認要求形式の体系的記述を行なっている。

第X章「思考動詞のモーダル化」では、思考動詞「思う」のモーダル化の精密な記述を行なう。

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、手堅い言語学的方法論ときわめて精度の高い記述によって、叙述文と疑問文との相関性という新たな視界をモダリティ研究に切り開いたものである。

本論文では、モダリティの複雑な体系・構造を包括的に捉えるにあたって、形態論的カテゴリーとしてのムードと機能・意味的カテゴリーとしてのモダリティを区別し、段階的な記述を行なっている。モダリティの中核をなすムードの形態論的対立から出発して、スル系、スルダロウ系、スルカ系、スルダロウカ系の形式が「話し手の認識の仕方の違い」と「判断の成立の有無」でパラディグマティックな対立をなすことを明示し、「疑い」の諸形式を有標とする動態的モダリティの考察を経て、事実確認系の諸形式と当為確認系の諸形式の対立としての「確認要求」という機能・意味的カテゴリーの提示へと至る論述は説得的である。また、単純な形態素主義を否定することによって、ダロウネにおける「行為実行の約束の要求」「懸念確認」等の複合的モダリティの派生過程が指摘されていることや、思考動詞「思う」のモーダル化における語彙の意味とテンス・アスペクト・極性の相関性の指摘が適切になされていることも特筆すべきであろう。

あえて注文をつければ、「反実仮想」の位置づけ、終助辞「ネ」が終助辞「ナ」と共有するとする「認識の現場性」の規定、過去形式におけるテンスの意味とモーダルな意味との関係についてのより説得的な論述が望まれよう。考察対象としたテキストの一覧も欲しいところである。

総じて、本論文ではじめて体系的に提示された認識的モダリティと疑問の相関性についての総合的記述は、研究史的に大きな意義をもつものである。よって本研究科委員会は、本論文を博士（文学）の学位にふさわしい価値を有するものと認定する。